

やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド

大野 睦



第十三章

子ども感性

親との時間

夏休みの屋久島はいつも増して家族連れの観光客で賑わう。私の友人や知人が家族を連れて屋久島に来たり、屋久島を故郷とする家族が帰ってきて過ごしたり、屋久島に暮らしていても屋久島の大自然の中でゆっくりと子どもと遊ぶ機会をそう多く作れるわけでもなく、そんな家族の案内をさせていただくことが私の忙しい夏のひとつの楽しみでもある。そしてこの夏休みも初めての屋久島を過ごした家族に出会えた。いつも忙しく夜遅く帰ってくる父親の背中を彼はどのように見ているのだろうか。家族揃って出かけることはあっても父とふたりだけで旅をすることに緊張していたのだ

ろうか。彼は言葉少なく私の話に応えていた。聞けば元々おとなしい性格だと言うが楽しんでくれれば良いな、とだけ願っていた。子供にとってはそれが屋久島でなくても何処でも良かったかもしれない。でも父は屋久島に連れて行こうと決めていた。

弟や妹がいて、母がいる家での時間とは違い、父が自分のことだけを見ている。屋久島の大自然にふれ、時間が経つにつれて彼の表情は豊かになってゆく。そこにあるのは特別な自然ではない。本来あるべき自然の中で、緊張はほぐれていったのかもしれない。



樹を見て森を見ず



大人にしてみれば、ガイドブックに載っている名所を巡ることが観光の大きな目的に思えてしまう。でも子供の感性はそこだけにはなく、でこぼこした山道を自分の足で歩くことが楽しかったり、そこに暮らす生き物たちを眺めていることの方が楽しいのかもしれない。目的地に向かって歩くことより、その森を楽しんでいる様子は、いつも大人が樹を見て森を見ていないことを教えてくれた。



大きな成長

海の水がしょっぱい、山を歩くのはしんどい、砂浜を歩くと靴に砂が入って痛いから嫌だ... など子供たちが自然を楽しむには入口から大きなハードルがある。自然の中で精いっぱい生きる生き物の姿はそこにいて子供たちを成長させる。もっともっと楽しみたいと思うようになるのだろ

うか。気がつけば嫌いだったはずのことに自ら立ち向かっている。目の前で生きるチカラをもらっているのだろう。もちろん自然の中では、死に向き合うこともある。それでも目を背けず、しっかりと何かを感じている様子がはっきりと見える。

伝えたいこと

思えば、こうして都会で暮らす子供たちに日本の本当の自然の素晴らしさを伝えたくてネイチャーガイドという仕事を選んだ私。この夏は、限られた時間の中で、数家族と朝から晩まで一緒に過ごし、屋久島の自然を案内した。子供にとって初めて会う私は屋久島でいつも楽しいことをしていて、それが仕事だという。そんな仕事があることを都会で暮らす子供たちにしてみたら不思議かもしれない。でも、屋久島に戻ってきたら遊んでくれる人がいる、とでも覚えていてくれれば幸い。子供たちに伝えたいことは多くを語る必要もなく、この屋久島に来たら感じる日本の自然の素晴らしさを記憶の片隅にずっと残っていてくれさえすれば良いと思う。もちろん、

その背景には日本が歩んできた時代があり屋久島ならではの歴史がある。それはまた大人になってから知って深く理解する機会があるだろう。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

